

『日本教育新聞』一九六九年四月～五月頃

時の
話題



ビジョンなきとき汚職流行す

矢口 新

教育界の汚職の摘発が目だちはじめている。教育者を聖職者と考えている人々は、まことに残念至極の現象だと思ふにちがいない。しかし、いつの頃からか三卜先生などといわれて、アルバイト、リベート、プレゼントの上にあぐらをかく先生が多いことを知っている人もいる。プレゼントを受けとることの上手な人は、それを使うことも上手にちがいない。教育委員や県会議員にうまくとりかかっているのは先生だというのは、知っている人は知っているのだ。それは法にふれないことだろうが、紙一重であろう。矜持の点からいえば落第である。いわば汚職不感症であろう。こう考えると摘発されているのは九牛の一毛であろう。情けないことだが、これが現実だと思ふ。

モラルの低下と一言にして片づけてしまふのはやすいが、それではどうしたらよいの

だとなると、手がないではすまされまい。

教育者といえども人間だから、浮世のことに超然として、いつさいの利害打算から離れて生活しろといつても、それは無理というものであろう。功名心もあるうし、人の上に立つて仕事もやってみたいだろう。それは誰にとつても結構なことである。ただそれを仕事の世界で自分の力で獲得するのが当たり前なことである。いわば真剣勝負で勝をしめるのが当然である。そこで卑怯な手を使つては誰も顔をしかめるだろう。これも世の常識である。

いま教育界にそれでは真剣勝負の場所があるかという、それがいいのではないか。いな真剣勝負をして行くに足るものが見えていないのではないか。これは一人一人の先生の問題より、教育全体の問題、社会の問題である。昔の話にたとえるなら、江戸時代の

初期、武道はなやかなりし頃は、立派な武芸師範が数多く輩出した。しかし世が太平になると、武道、武術の意義が見失われて、怪しげな師範が多くなり、やくざの用心棒のようなものがふえた。弱い者いじめをやり、袖の下を要求するのが当然のようになった。何となくいまの時代に似ているではないか。つまり智をみがき、腕をみがき、真剣勝負に自己をかける場がないのである。

これを現代式にいうと、ビジョンがない所にモラルも低下するということであらう。

ビジョンというのは一人一人が考えているということではない。もっと社会的な性格のものである。経済成長だけが問題になって、百年来の教育の仕方をしていて、俸給が上がる以外に何も望むものがないという状態になれば、何を考えるようになるかは想像がつくではないか。教育の仕事などは、軽く口先ですませることになつてしまえば、そう考えるようになってしまえば、次のやることは汚職ぐらいであらう。昔の武術師範と同じであらう。

しかしそうしているうちに、世の中はどんどん変わつて、やがて失業する時がくるのではないか。昔の武術師範のように。

(能力開発工学センター常務理事)